

ポスターA-3

ポスター発表(実践)

DLA<読む>短縮版を活用した生徒の現状把握と支援体制の構築

—外国人生徒の教科学習言語能力の向上を目指して—

篠原啓史・松本友美 (愛知県豊田市立保見中学校)

平吹洋子 (愛知県豊田市立保見中学校長)・櫻井千穂 (同志社大学)

実践の場の特徴

本校は、南米出身者の居住率が高い保見団地を学区に含む全校281名(内127名(45.2%)が外国人生徒)の小規模校である。これまで日本語指導のための加配教員やポルトガル語ができる日本語指導員が配置され、滞日期間の比較的浅い生徒への日本語初期指導などが行われてきた。しかしながら、近年、滞日期間の長い外国人生徒の学習でのつまづきが顕著になり、受け入れ初期の対応だけでなく、教科学習言語能力の向上を目指した学校全体での取り組みが急務となった。

実践の目標

DLA<読む>短縮版で教科学習言語能力の基盤となる「読書力」を探り、生徒の能力に応じた支援体制の構築を目指す。

具体的な実践の内容とその過程

1. 2018年度前期(4~9月)に、限られた課内時間で多数の生徒の読書力を把握するため、15分でステージ判定ができるDLA<読む>の短縮版を作成し、DLA実施訓練を開始。
2. 2018年9月に1学年の全外国人生徒38名を対象にDLA<読む>短縮版を実施。
3. チェックシートと録画映像をもとにステージ判定。下記の結果によりグループ化。

ステージ・滞日年数	ステージ5	ステージ4	ステージ3	ステージ2	ステージ1
8~13年	6	5	12	2	-
4~7年	-	-	3	-	5
~3年	-	1	-	1	3
計	6	6	15	3	8

4. 2018年9月より、後期(10~3月)の時間割改善、在籍授業でのユニバーサルデザインの活用、読書プログラム、複数言語使用生徒への先行型授業を開始。

結果と考察(目標の達成度・課題)

DLA<読む>短縮版の実施により短時間で読書力を把握でき、ステージ別にグループ化ができた。これにより学校の教員全体で生徒の言語能力レベルを共有でき、これまで支援を受けていなかった生徒への支援時間の確保や、在籍学級でのわかりやすい授業の実践にもつながっている。しかし、授業実践の効果検証はこれからの課題であり、母語力の把握と複数言語の伸長に向けた支援方法も模索中である。発表では、本実践の共有を通して、集住地域の中学における支援体制について議論を深めたい。

【引用文献】文部科学省(2014)『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA』